

第 4 回プロダクトガバナンス有識者会議 ご発言要旨

開催日：2025 年 10 月 30 日

プロダクトガバナンス有識者会議メンバー（3 名）：

野尻 哲史氏	合同会社フィンウェル研究所 代表
藤沢 久美氏	株式会社国際社会経済研究所 理事長
高井 宏章氏	経済コラムニスト、千葉商科大学附属高校校長

■ ご発言要旨

ファンド・レビュー・レポート（以下、レポート）では、2024 年度版のレポート（2025 年 3 月 28 日公表）から、評価結果の表示において赤、黄、緑の印に追加的に黒枠をつけている。また 2025 年度版のレポート（2025 年 11 月 14 日公表）からは今までの縦型レイアウトから横型にするなどの変更を行っており、これら評価結果の表記や評価方法についてご意見、ご指摘をいただいた。

1. 評価の見せ方や開示方法について

- 黒枠をつけることは、複雑になるのではという気がした。かえって説明の負荷を増やすことになるのではないかと。どう説明していくかに重きを置いた方がよいように思う。
- 評価の表記が増えることは、理解してから見ると見やすいが、理解するまでにハードルがある。黒枠をつけるなど評価結果の記号を増やすと情報量は多くなるが、咀嚼するのが大変になる。
- 横型にして見やすくなったが、他社のレポートと比べてフォントサイズが小さい。大きくするだけで印象は変わる。個別の説明ページで 1 ファンド 1 ページという縛りにする必要はなく、2 ページにまたがってもいいのではないかと。
- 誰に向けたレポートなのかという点に戻った方がよい。分かりやすく、シンプルに改良しているが、どれくらい見られているかを考える必要がある。資産運用研究所のレポートで、投資信託を買う際に何を重視するかの調査では、NISA で投資できること、コストが安いことが上位だ。良い商品を正しく多く作ってほしい。

2. 評価方法等について

- （評価結果の表記をシンプルにしたとしても）今までの改善取り組みのログが見られれば、きちんとやっていることが伝わると思う。
- 運用実績は結果であり、これをプロダクトガバナンスの評価に入れるのはどうなのか。運用の結果を見せるのではなく、商品設定当初の想定とずれがある場合に赤評価を付ける方がわかりやすい。一定期間のパフォーマンスが悪かったから赤評価ではなく、パフォーマンスが悪いという結果が出る前に問題点を指摘、改善してほしい。
- 赤評価の持つ意味をどうするかという議論に戻ってもよいのではと思う。
- 当初の約束通りの運用かという点で評価をし、問題があるものに絞って開示をしてきちんと改善するということがよいのではないか。
- プロダクトガバナンスとは、商品が本当に本来の目的通り運用されているのかどうかをチェックすること。運用会社で実施した評価をそのまま投資家に伝えるのではなく、間に入る人が仲介しやすくすればよい。運用会社はその先の見直しや改善に向かう努力にリソースをかけた方がよいのではないか。

3. その他

- 運用会社側で情報をそぎ落として厳選するより、AI が進んできている中、まずは原データを準備して AI で分析可能なように提示した方が、様々な切り口で分析に使ってもらえるのではないか。

以上